

Fate/Xenoblade

アーツ！トラス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

召喚に応じたものは神を切り、世界を作り替えた男!?

見た目は軟弱系理系男子。本当は猪突猛進系熱血男子。そんな彼がカルデアになぜか召喚されてしまった。神を断つその剣はカルデアで再び目覚める。

目次

戦力確認	fate/Xenoblade
5	1

f a t e / X e n o b l a d e

僕はどこにいるんだろう。ここはとても寒くてまるでヴァラクの雪山のようだ。きつとここは、巨神界でも機神界でも神がない世界でもないんだろうな。

少し眠たいな。眠ろう

立香「召喚しよう。今すぐ！」

マシユ「先輩、召喚は1日1回までですよ。」

立香「いいじゃん！そんなに固いマシユは好きじゃないな。」

マシユ「うつ・・・仕方ないですね。一回だけですよ？」

立香「マシユ大好き！」

マシユ「先輩・・・私も好きです！」

ダ・ヴィンチ（甘々だなあ。マシユは、まあ面白いからいいか。）

立香「出でよ！サーヴァント！」

???「ここは？どこだ？見たところ機械が多いけど。」

立香「わーい！新しいサーヴァントだ！やったー！」

???「君は誰？」

立香「私は藤丸立香。君のマスターだよ。」

???「僕がサーヴァント？うーん、違う気がするけどまあいいか。じゃあ、自己紹介だね。僕はセイバー。名前はシユルクよろしく。」

立香「シユルクだね。よろしく。」

マシユ「セイバーの方ですか。見たところ宝具はその剣ですか？」

シユルク「そうだよ。これは、神剣モナドと言ってねなんでも切れるよ。」

立香「本当?!じゃあ、ちよつと待ってて！」

シユルク「行っちゃった。元気な子なんだね。」

マシユ「お恥ずかしながら。あれが我がカルデアのマスターなんです。実力は本物な

んですよ？」

シユルク「うん、分かるよ。あの目は何度も辛い事や大変なことを背負ってきたんだろうね。」

マシユ「はい、人理を修復もしました。」

シユルク「人理を修復？それは穏やかじゃないね。」

立香「シユルク！連れてきたよ。この鎧を切って！」

マシユ「この鎧、カルナさんのものじゃ。」

立香「ちゃんと許可ももらったよ。切ってもいいかも聞いたよ。そしたら切れたら切

れたで面白いつて言つて貸してくれたよ。」

シユルク「大丈夫。これ切つても？」

立香「うん、一息にスパツと。」

シユルク「じゃあ、切るから離れてね。触ると危ないし。モナドの力よ。」

その瞬間、モナドと呼ばれた武器が変形し、光の葉が出たかと思うと一気に鎧へ叩きつけた。

立香「すごい。まるで、溶接してるみたいだ。」

シユルク「だめだ。まったく切れない。どんな素材でこの鎧はできているんだろう？」

立香「でも、切つた部分が爛れてる。」

マシユ「この剣に触れない方がいいですね。」

ギルガメツシユ「面白い事をしているな。マスター」

立香「あつ、ギル。どうしたの？」

ギルガメツシユ「何やら、新たなサーヴァントを召喚したと聞いてな。見に来たのだ。」

立香「ふーん、そうなんだ。じゃあ紹介するねこちらが新しくカルデアに来たシユルクだよ。」

シユルク「よろしく。ギルガメツシユさん、でいいのかな？」

ギルガメツシユ「ほう、我の名を呼ぶか雑種が。だが許す、貴様は面白い物を持つて
いるようだからな。」

立香「だめだよ、ギルガメツシユ。ちゃんと仲良くしなくちゃ。」

ギルガメツシユ「シユルクとやらその剣は普通の剣ではあるまい。とても不思議な力
を秘めているようだな。」

シユルク「この剣か、これはモナドと言つてねこの世に存在しているものなら大体の
ものは切れるよ。例えばそれが神であつたとしてもね。」

ギルガメツシユ「ほう、神を切る剣かなかなか面白い物だな。」

そう言うとギルガメツシユは去つて行つた。

立香「じゃあ、カルデアの案内と部屋の場所を教えなきゃね。」

シユルク「うん、よろしく。」

戦力確認

シユルク「どうしてこうなったんだっけ？」

僕は原因を振り返っている。周りは大騒ぎだ。モナドを使用したのが拙かったんだろっか？

立香「シユルク君、君をテストします。」

マシユ「ただの、シユミレーターで模擬戦闘ですよね？」

立香「なんか、こう言った方がカッコいいじゃん！」

シユルク「体力テストみたいなものかい？良いよ、特に何もないしね。」

立香「では、メンバーを紹介します。ナンバー1！我が後輩、マシユです！」

マシユ「余り、力まず行きましようね。」

立香「ナンバー2！いつも過労死寸前、孔明先生です！」

孔明「私は忙しいんだがね。」

立香「ゲームでしょ。我慢してよ。」

孔明「他の奴でもいいんじゃないのか？マーリンとかいるだろう？」

立香「ダメです。」

孔明「クソ、何故私ばかり。」

立香「ナンバー3期待の新人、シユルク君です!」

シユルク「期待か、応えられるようにしなきゃね。」

立香「最後に、補欠として玉藻ちゃんが同行します。」

玉藻「私としては、今日はゴロゴロしていたかったですね。新人さんもいらつしやることですし、先輩として恰好が付きませんしね。」

立香「では、行くぞー!」

マシユ「はい!行きますよう。」

「シミュレーションヲカイシシマス。レベル5カイシ。」

立香「んっ? 敵出てこないね?」

マシユ「故障でしょうか? 連絡を取りますね。」

「レベルガサイダイニヒキアゲラレマシタ。サーヴァントジョウホウヲロードシテイマス。」

立香「ちょっと!なんで!? 戦力確認なんだからそこまでしなくて良いよ!」

マシユ「外部と連絡できません! マスターこちらへ!」

孔明「戦闘準備だ! 構えろ!」

玉藻「嫌な予感がします。油断なさらないように。」

シユルク「視えた！上から来るぞ！」

玉藻「上から？何故分かるんです？」

孔明「直感か？なら、信用できるな。」

マシユ「来ます。」

立香「げっ!?あれ、ギルじゃないの！なんで!?!」

シミュレーターが選んだサーヴァントはよりにもよって英雄王だった。

マシユ「攻撃きます。」

シユルク「ここは、任せて！モナドシールド！」

立香「攻撃を弾いてる！なんで！」

シユルク「マシユ！マスター狙いの攻撃が来る！防いで！」

マシユ「シールドエフェクト！頑張ります。」

立香「先生！シユルクの援護を！」

孔明「任せろ！これでどうだ？」

立香「玉藻は足止めお願い！」

玉藻「了解しました。これでそうですか？」

シユルク「拙い！宝具を撃つつもりだ！退避するんだ！」

マシユ「開帳始まりです。ダメです！逃げきれません。マスター、令呪を！」

立香「了解！令呪を…」

シユルク「マスター、令呪を僕に使ってくれないか？」

立香「どうして？マシユなら防げるよ。大丈夫だよ！」

シユルク「ダメだ！マシユが死んでしまう！僕ならなんとかできる！早く！」

立香「分かった、令呪をシユルクに使う。」

マシユ「先輩！危険です！」

立香「大丈夫。何とかなるよ！それじゃあ、令呪を持って命ずる！宝具を開帳して、

シユルク！」

シユルク「宝具開帳。僕たちは神を切り、未来を切り開く！神断^モちし、絆^ドの光劍^{III}」

その光景は英雄王の宝具を切り裂き、英雄王をも切り裂いた。

立香「凄^{III}い！英雄王に勝^{III}つちやた…。」

玉藻「あれ、神を断^{III}つ劍ですよ。私や神聖を持つサーヴァントが喰^{III}らえば一たまりもありませんよ。」

孔明「騎士王のエクスカリバーに通^{III}ずるものがあるなあれは。」

「シミュレーションガシユウリヨウシマシタ。カルデアへモドリマス。」

カルデアへ戻^{III}つてから聞^{III}かさされたが、シミュレーションシステムが誤^{III}作動^{III}を起^{III}こしたのは偶然^{III}だったそうだ。